

# 震災 再生の歩み

2015 5月

東日本大震災から復興していく  
被災地の現状を原則毎月11日に報告します

# 新天地に古里の面影

## 玉浦西 集団移転

東日本大震災の被災地で、沿岸6地区が集団移転する宮城県岩沼市の玉浦西地区では7月の「まちびらき」に向け、住民の引っ越しが急ピッチで進む。ふるさとの原風景を生かすなど、街づくりに住民意見を反映させてきた。防災集団移転促進事業の成功例と言われるが、高齢化が進むコミュニティをどう維持していくか、模索も始まっている。

「まちびらき」

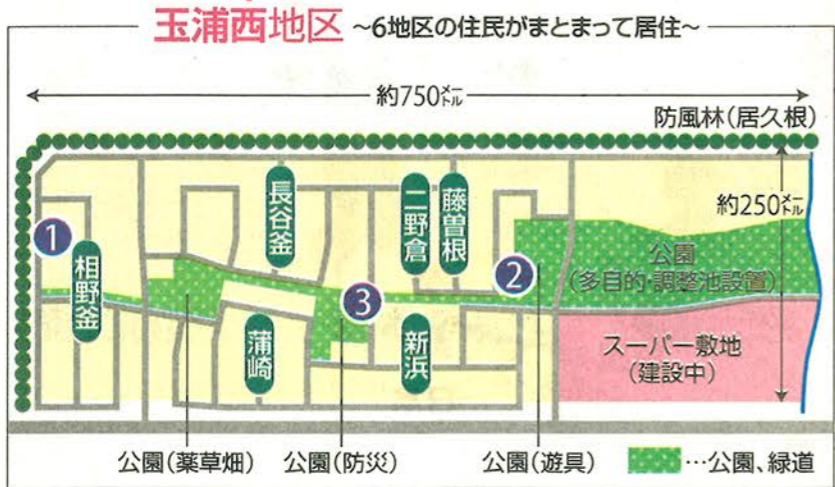
海岸から約3キロ内陸に入ると、田んぼの真ん中に真新しい戸建てや災害公営住宅が立ち並ぶ街が現れる。津波で100人以上が亡くなった沿岸6地区を一つに集約した玉浦西地区には、農地を2倍かさ上げした約20分の造成地に約1000人が移り住む。

すでに約8割の世帯が転居し、今月中に引っ越しはほぼ完了。大型スーパーが開業する7月に合わせ、「まちびらき」が行われる。

今月6日、地区内であるま落としやコンサートなどの交流イベントが開かれた。公園に響く子供たちの歓声に「玉浦西まちづくり住民協議会」会長の中川勝義さん(76)は「立派な街ができた」と目を細めつつ、「本当の街づくりはこれから。10年、20年先も若い世代が住める場所になれば」と決意を語る。

議論一年半

旧6地区の住民が、集団移転を決めたのは2011年11月。同市では、地区ごとに仮設住宅が割り振られ、住民同士の間が維持された。「ま



防風林を前に満足そうな表情を浮かべる中川さん

### 防災集団移転促進事業

被災した地域の住居を安全な場所に集約させる事業。自治体が移転先の宅地を整備し、移転後の跡地も買い取る。国土交通省によると、2014年末現在、被災3県で計99,566戸が移転を予定している。

(社会部 野崎達也)

「一緒に暮らそう」という一体感があつた。中川さんはその振り返る。

### 地区ごと転居 ■ 伝統の防風林 ■ 運河は緑道に

さらに、新しい街づくりの計画に住民意見を反映させるため、住民代表に有識者を加えた「まちづくり検討委員会」(23人)が12年6月にスタート。約一年半に計28回の会合で議論を重ねた。その中でまず打ち出されたのは、「コミュニティ重視」だ。転居後も元の地区ごとに暮らせるよう、居住場所を割り振った。

さらに、住民たちは、愛着を持って新しい街に住めるように「古里の原風景を生かしたい」と考えたという。一つが、強風から家を守る「居久根」と呼ばれる防風林。古くから農村に伝わる知恵であり、北側と西側の外周約1キロに木々を植えた。



災害公営住宅などが完成し、7月に「まちびらき」を控える玉浦西地区(本社機から)



真新しい家が並ぶ地区の公園で子供たちの歓声が響く



真山堀をモチーフに、住民が出会ってふれ合うきっかけを作ること敷設された緑道

## 住民が工夫した新しい街

岩沼市は仙台市街から車で30分程度。震災後は、働き盛りの世代を中心に、通勤などに便利な場所に自宅を再建する人が相次いだ。

震災前に465戸だった旧6地区で、集団移転するのは282戸。地区の高齢化率は3割を超え、周辺を10歩も上回っている。

旧6地区で長谷釜地区会長の菊地幸一さん(66)は「今は親と離れて暮らす子も、様々な事情で集団移転を断念した人も、ここがふるさとだと思つて訪れ、いつの日か一緒に住みたいと思つてほしい」と願う。新住民を受け入れるための空き区画もある。地区では、今後も街づくりで培った議論の経験を生かし、若い世代に向けて街の魅力を発信していくという。

岩沼市出身で「玉浦西地区まちづくり検討委員会」のアドバイザーを務めた石川幹子・中央大教授(都市環境計画)の話「家を建てるだけでは街はできない。長い歴史に裏打ちされた集落のたたずまいが『文化的景観』であり、玉浦西では、住民たちが自ら議論し、『居久根』や『真山緑道』という地域に伝わる知恵を新しい街に取り入れた。それを根付かせ、一人ひとりが『素晴らしい』と実感できる街をつくりたい」と大切だ。

集落の知恵根付く街を